【2009.10.1　吉池宛】

拝復、爽涼の候、
ご清祥にておすごしのことと存じます。
さて、「謹呈　著者」の短冊の見本、拝受しました。
また、私の住所まで添えていただいて、ありがとうございました。
古代文字資料館に礼状がとどいてもいそがしでことは思っていました。十四通もの返却があったとは、予想外です。
ところで、村崎恭子氏には九月二十八日にEXPACKで送りました。
一昨日、健康診断（通常のもの）に行きました。結果は来週になってわかります。
右、まずは一筆、受領のお礼まで。
ご健勝を祈りつつ。

十月一日　敬具

【2009.10.6　吉池宛】

拝復　めっきり秋らしくなりました。
ご清祥にておすごしのことと存じます。
さて、このほど、「略年譜稿」、P.288上段に橋士博本上のごときミスプリをみつけました。『著述拾遺』以来のもので、『著述拾遺』の正誤表にも落ちています。何としていた人だろうと歎いています。
ところで、あて先不明でもどって来たものは、先日までで十四通だったそうですが、その後ふえましたか。
この問題をどう処理するかについては、資料館の皆様のご意見に従います。ただいま、大島一郎先生は胃ガンの手術でご入院中ですが、どなたかに頼みましょう、鈴木寧先生のばあいなどは、英文の人等に聞いあわせます。
皆様お疲れでしょうし、学会もありますから（私は不参加です。）しばらくしてから、ご指示下さい。
ご健勝を祈りつつ。

十月六　敬具

【2009.10.8　吉池宛】

1.

拝復　寒露の候となりました。
ご清祥にておすごしのことと存じます。
さて、貴信、本日に拝受しました。いろいろとお手数わずらわして、申しわけありません。いつもながらのおべっかい、お礼を申しあげます。
返却されたものについて、年賀状を手がかりに調べました。
◇小野田三男（黒田さやかさんの先生で坂露寮にも顔を出していました。毎年のように住所が変わります。）
◇田中宣廣
◇伊藤文
個人情報のため削除
古代文字資料館
◇大名秀紀
長崎外国語大学外国語学部
（もしよその地に移ったのであっても、学校で転送してくれるでしょう。もしそうならなければ、外大の誰かにたずねます。）
とりあえず、以上です。菊田正信氏は傳田氏など、岩見輝彦氏は水谷誠氏に問い合わせます。辛嶋静志氏は『『長阿含経』の原語の研究　音写語分析を中心として』の著者です。熊本裕氏

2.

あたりに照会すれば、わかるかもしれません。
金森久雄氏は、国民学術協会の会でよく質問した人です。気ながに調べれば、わかると思います。当時の名簿のコピーはさしあげたと思います。
資料館あての礼状、コピーしてくださってありがとうございました。一人を除いて、すべて私の方にも礼状がとどいています。吉田金彦氏は、吉田兼好の子孫です。
ただ一人の三輪春信氏は、『著述拾遺』のときに私あてにハガキをくれました。このような人が鹿児島にいるということはずっと覚えていましたが、姓名は忘れました。今年さがしものをしていて、そのハガキが偶然にみつかり、鹿児島大のことでもあり、この人をご存じか、この住所で大丈夫かと竹越氏にたずねました。そのハガキの表裏は、コピーで竹越氏の手もとに残っていると思います。
「どのようにして地方在住の私のことをお知りになったか」とありますが、昔のことはすっかりお忘れなのでしょうか。
お手数をわずらわして申しわけありませんが、よろしくお願いいたします。
取まずはとり急ぎ、一筆お礼まで。
ご健勝を祈りつつ。

敬具

3,

十月八日

吉池孝一様

慶谷壽信

【2009.11.9　吉池宛】

1.

拝復　早、もので、もう立冬のころとなりました。
ご清祥にておすごしのことと存じます。
さて、先日は、『有坂秀世研究』と『学問』四二冊を
宅急便にてお送り下さって、ありがとうございました。
そのうち一冊の裏にゴム糊がついて、注意深くはがした
つもりでしたが、裏表紙の一部分がそこなわれましたので、
これは私のスペアとしたいと思います。それで、まだお手もと
にある菊田氏分と裏表紙のいたんだものの代りと合せて
二冊と、またお手数ですが、お送りいただけませんでしょうか。
急ぎません。
十月六日(金)には膵越の鈴木病院に行きました。
お世話になった前理事長は、一九九四年に九十五歳で
亡くなったそうで、二男の鈴木理事長に会い、一本を差上し
ました。鈴木病院は、療養所ができてから来年で
一〇〇年だそうで、その記念のときに活用しましょうと喜
んでいただけました。鎌倉はそれほど遠いところでもない
のに、翌七日(土)から坐骨が痛くなり、二日ほど横になって
身体を休めました。今日は、軽快に歩けるという状態では
ありませんが、歩くことはできるようになりました。すこし
痛みます。
十月二十一日(水)に学士院へ出かけたときは、疲れるほど
疲れましたが、坐骨にはひびきませんでした。学士院では、
個人情報を教えることはできぬと、私が鶴木氏あての書
信と本を学士院に送り、学士院がその中から書信と本

2.

とどり申して送るということになりました。この件は、前便に書いたと思います。その後、思ったより早く、十月二日(月)に鶴木氏より受領したという封書を受けとりました。

岩見氏からの返信はまだありません。萩原さんについては、古屋氏から七年前のフランスの住所が知らされました。試しにそこあて手紙を書くしかありません。

まだ、林健太郎氏分でお手数をかけます。

なお、三輪伸春氏からの手紙に、熊本大(一冊)を送ってもらったとありましたので、私も二冊ほど送っていただきたいところがあります。

一、〒五二一二九六
長崎市横尾三一一五一一 長崎外国語大学
メディアセンター内 図書館

二、名古屋大学図書館
住所は忘れてしまいました。さがせばみつかると思いますが、手紙がおくれます。インターネットなどでお願いします。私にはそれができません。

この二ヶ所、よろしくお願いします。

以上、鶴木氏の受領のことを除き、電話で申あげたことですが、念のため書面に記しました。

ご健勝を祈念しつつ。

敬具

3.

十一月九日

吉池孝一様

慶谷書信

【2009.11.17　吉池宛】

1.

拝復　もうそこまで冬が来てる感じで、冷えこむ日です。
お元気におすごしでしょうか。おうかがいします。
さて、本日、宅急便にて本二冊と KOTONOHA、石井望氏
からの抜刷類を拝受、貴信に接しました。
石井氏の一筆箋に書かれたものは、資料館あてですから、
お送しいたします。私あての封筒に同じようなものが入って
いました。抜刷類は、竹越氏あて同じものが入っているでしょうが、
たとえば、「韻鏡内外轉決疑」、「中州全韻圖稿」、「慶文
倭音輸相校釋」、「倭漢音圖旋法解」（『中國語文
研究』）、「沈約創定紐位高下說」（『輔仁國文學報』）
などです。最近は中国の歌（崑曲等）を歌っていますが、
藤堂先生のお弟子さんです。
ところで、岩見輝彦氏からは何の連絡もありませんので、
改めて直接三浦梅園資料館あてに往復ハガキを出して、
岩見氏の在不在をたずねました。前回も往信末に、該当
者なきばあい、その旨ご通知下さいと書いておいたのですが、目に
とまらなかったのでしょう。今度は、在不在くらいはハッキリ
すると思います。
まだ一つ、林健太郎氏分が残ってますね。お手数かけて申し
わけありませんが、いずれ、よろしくお願ひします。
十一月中にいろんなことが一段落したら、愛知県美に
出向いて、お三方にお礼を申しあげるつもりでいますが、寒く
なると調子が悪くなりそうなので、しばらく先に延ばさせて下
さい。

2.

右、とりあえず一筆お礼まで。
ご健勝を祈念しつつ。

十月十七日

吉池孝一様

慶谷壽信　敬具

【2009.12.1　吉池宛】

1.

拝啓　師走のあわただしいころとなりました。といっても、私自身には特別にあわただしいことはありません。サンデー毎日の日々にもどりかけています。

お三方ともお変わりはございませんか。おうかがいいたします。

さて、今年は1月から『有坂秀世研究―人と学問―』のことでお世話になりました。本を送った先から、いいお弟子さんにめぐまれて幸せですね、という手紙をたくさん受けとりました。通常なら、本当に考えられないことです。皆さんには授業もあり、学会もあり、ご多忙中にもかかわらず、ほぼ予定した時期までに出版にこぎつけていただきました。心からお礼を申しあげます。

また発送についてもお世話になりました。まだ二件ほど片づかないものがありますが、あまりお手数をわずらわすわけにもいきませんので、もうすこししても片づかないようでしたら、私の方で処理します。たとえば、林健太郎先生のお宅は、住所からみて、大島一郎先生のすぐそばで、何度かがんの手術で入院される大島先生のおみまいを兼ねて、とどけることもできましょう。

このほど、形ばかりのものとして、別便で商品券をお送りいたします。ちょうど私が還暦になったとき、まわりにいた若い諸氏から還暦祝いとして商品券を贈られました。結局、イージー・オーダーのスーツとネクタイを買い、東海大で開かれた中国語学会大会のときに着用して、贈ってくれた諸氏に記念の品としてみてもらいました。これは単なる一例にすぎません。

皆さんにどのようにあつかえと強制するすじのものではありませんから、ご随意になさって下さい。ただし、今年の楽しかった思いでのしるしとして、なにとぞまげてご笑納下さい。

同文の手紙を三通書くのも能のないことと考え、このようにして礼状とします。

ここのところ、まだ暖かくて私は助かっていますが、いずれ寒い日が訪ずれましょう。

おからだ大切によいお年をお迎え下さい。

2.

右、まずは一筆、お礼までに認めました。

敬具

平成二十一年十二月一日

慶谷壽信

吉池孝一　様

3.

【2009.12.7　竹越宛】

拝復　大雪の候となりました。
ご清祥にておすごしのことと存じます。
さて、貴翰、十二月音に拝受しました。お送りしたもの、お納めいただけるとのことで安心しました。吉池氏への手紙にも書きましたように、本来なら十一月末に貴宅にうかがってお礼を申しあげるべきなのですが、春暖かくなる頃まで、先延ばしさせていただきました。
ご同封いただいた望月氏の書簡、興味深く拝見しました。五番町小学校は、卒業生が協力して、戦時中の学区内の地図を再構成したところです。いま私からお手紙さしあげるのもぶしつけですから、先方から何か意志表示があれば、手紙を書きたいと思います。広島大の加納光徳氏の奥さんもこの(ん)のご多身ですが、お若いでしょうから、戦後のだぶ後のことしか、ご存じないでしょう。
ご健勝を祈念しつつ。

十二月七日

敬具

【2009.12.8　吉池宛】

拝復　大雪の候となりました。
ご清祥にておすごしのことと存じます。
さて、昨日、貴信と KOTONOIA(第8号)を拝受しました。ご多忙中にかかわらず、機関誌を準備されたことに敬意を表します。
ところで、お送りしたもの、受けとっていただいて一安心です。
岩見輝彦氏の件、なかなか返事が来ないので、直接、三浦梅園資料館に問いあわせました。彼は一昨年四月に資料館を退職して、郷里に帰ったとのこと。水谷誠氏に頼んで住所さがしをしてもらいましたが、みつからず。電話番号が控えてあったという、その番号をまわしてみたら、「現在、使われておりません」で、手がかりがなくなりました。本当は私があずかって、気長にさがします。林健太郎氏の件が一段落したら(どうなかったら)、これも私があずかります。ただ、宅急便ばかりでは申しわけありませんので、そのときは、両者とも開封の印刷物でお願いします。
右、まずは一筆、お礼と報告まで。
ご健勝を祈念しつつ。

十二月八日　敬具

【2009.12.14　吉池宛】

1.

拝啓　師走も半ばとなってしまいました。
ご清祥にておすごしのことと存じます。
さて、岩見氏の件、先便に記したとおりですので、林健太郎氏の件が落着すれば、一応、終りとなります。

ところで、今回の本版に対し、どのような意見が寄せられているか、知りたいとお思いでしょうか。
そこで、封書十五通、ハガキ三十通ほどごらんに入れます。個人的な部分もありますので、その（）は軽く読み捨てて下さい。コピーをとったり、メモをとったりなさらずにご返却下さい。

二、三説明を加えますと、吉田金彦氏は吉田兼好の子孫。甥の樺島紳一郎氏の「コンペイ糖」は、身内でなければ知り得ない、ほほえましいエピソードです。
氏は赤色の礼状でした。藤田良雄先生には、先日、承諾もなく有坂氏と兼ねて慶祝したことをおわびしました。

以前、安田尚道氏の国語学会（於東京都立大）の発表を聞いたことがあります。長崎外大の私のコンピューター（学内の連絡事項をみるためだけに使っていました。）に「上代に於ける特殊な假名遣」のとでメールがありました。
その後、三澤淳次郎氏（『新訂鏡鏡』、『韻鏡の研究』等。小川環樹先生に論文を提出して、文学

2.

博士を授与されました。）が刊行していた『国語知識』の当該号のコピーを送付されました。原雑誌には赤色の使われていた部分があって、私の手ではコピーできないなと思っていましたが、今回のしごと中にどこかに行ってしまいました。大事にしすぎたのです。しかし捨てたのではありませんから、いずれ出て来ると思います。「いずれ」を待っているわけにもいきませんので、有坂論文全部を紹介している安田論文のコピーを三部同封します。すでにご存じで、コピーぐらいはお持ちかもしれませんが、念のため、同封します。

なお、封書、ハガキには、エンピツで着信日等が書きつけてありますが、消えないようにして下さい。（二の補）

今回は、以上、三点について記しました。
ご健勝を祈念しつつ。

敬具

十二月十四

吉池孝一様

慶谷壽信

【2009.12.28　吉池宛】

1.

拝復　意義深かった一年も暮れようとしています。
ご清祥にてお過ごしのことと存じます。
さて、貴信、封書十五通、ハガキ三十通とともに、昨日、
書留にて拝受しました。お手数わずらわして、恐縮に
存じました。
ところで、安田尚道氏の論文、ご存じでしたか。
「上代に於ける特殊な假名づかひ」の「假名づかひ」の文字づかい
に対して、以前、どう思うかと聞かれました。
大正大学にきた論文目録、金田一先生にきた論文解読
の手紙とも、「假名遣」となっているし、有坂氏の文字づかい
としては「假名遣」であると答えました。
しかし、編集者の作意で「假名づかひ」となり、そのように印刷
されている以上、今後、目録や略年譜などでは、「假名づかひ」
とせざるをえないでしょうね。
なお、林田章義氏の礼状にあるように、全国の大学の
図書館に送るようにすべきだとのこと、私自身からは、まだ京大
図書館に送っていません。古代文字資料館からすでに送って
あれば、必要はありませんが、まだでしたら、残っていれば、一本を
お願いします。
そのほかに、私が非常勤で関係した大学、
東京大学教養学部、横浜市立大学、東北大学、大阪
大学、高知大学、富山大学、筑波大学、九州大学、山口大学
神奈川大学の各図書館にも一本を送っていただけませ
んでしょうか。いつも、やっかいなことをお願いするだけで、申し

2.

わけありません。
いよいよ厳しい寒さに向かいます折から、
おからだ大切によいお年をお迎えください。
敬具
十二月二十八日
慶谷壽信
吉池孝一様

【2009.12.29　竹越宛】

拝啓　特別なこの一年も終ろうとしてゐます。
ご清祥にておすごしのことと存じます。
さて、先日、小守郁子氏より全部を読了したということで、いろいろと感想が寄せられました。その中で、P.35、3-L10-7「……萬人に共通な現理想である。」のミス・プリ指摘を受けました。
P.288の博士（本）というように記録しておいて下さい。
ところで、本日の新聞によりますと、藤田良雄先生に多摩市澄江幸子市長より世界天文年を記念して栄誉をたたえるという顕彰状が渡されたとの記事がありました。おそらく多摩版だけでしょう。
先日、ごらんになった次男明雄氏のハガキにあったようなことの結果だと思います。
最後に、今年一年のご高配を深謝いたします。
いよいよ厳しい寒さに向かいます折から、
おからだ大切におそろいでよいお年をお迎え下さい。
十二月二十九日
敬具

【2010.1.11　吉池宛】

1

拝復　小寒の候、いよいよ本格的な冬となって来たようです。
お変わりございませんか。
さて、貴信と岩見氏分『有坂秀世研究』は一月九日に拝受しました。林健太郎氏分が片づいたということで、これでお手数をわずらわしていたことがすべてすみました。
どうもありがとうございました。心からお礼を申しあげます。
在仏の萩原久美子さんとはすでに二度手紙のやりとりがあり、本は今月中ごろ以降に送る予定です。
ところで、ミス・プリの指摘を受けて、竹越氏にハガキを出した後（十二月二十九日）に、藤田良雄先生の顕彰状のことに気付きました。同封した新聞のコピー、うっかりよくありませんか、三人分です。皆さんの技術なら、きれいなコピーにすることができるでしょう。
ここには「……、市の誇り。」とありますが、次男明雄氏からの年賀状によりますと、「あとがき」に私が書いたように、「……わが多摩市の誇りである。」となっていたそうで、剽窃のはなはだしいものです。
一月九日に長崎外大から転送されて来た手紙に、『日本語学大辞典』の項目執筆の依頼がありました。諾否の回答が十二月二十日となっているので、どうなるかわかりませんが、まるくおさめるために「諾」と回答します。項目は「有坂秀世」で、二二〇字以内。『国語学大辞典』での執筆は金田一春彦氏です。著作目録は『有坂秀世研究』（サブタイトルはつけないきまりらしい。）の「有坂秀世博士略年譜稿」参照、

2.

ということになるでしょうね。
右、二、三の報告を含めて、一筆お礼まで。
ご健勝を祈念しつつ。

一月十五日

敬具

慶谷壽信

吉池孝一 様

【2010.2.17　竹越宛】

1.

拝啓　二月に入って暦の上では春というのに、厳しい寒さがつづいています。
いかがおすごしですか。おうかがいします。私は、ちぢこまって、ひたすら暖かくなるのを待っています。
さて、暖かくなったら愛知県立大に出向いて、皆さんにお礼のごあいさつをしたいと思い、本来ならそうすべき十月末ごろを先延ばしにしていただくように申しあげました。
お三方に対してそれぞれ違った形で申しあげました。暖かくなったらとは、四、五月ごろを考えていましたが、四月から神戸外大に転出されることをうかがって、そういうわけにはいかなくなりました。
お引越しは、いつごろに予定されていますか。私としては三月十五日の有坂氏の命日に心光寺におかけするころか、奈良のお水取りがすんですこし暖かくなるころと思っています。三月中にということになれば、心光寺にお参りをしてから、三月二十日(土)に語学会の関東支部拡大例会があるまでの間が、それ以後ということになります。拡大例会は、ここ数年、駿河台の明大校舎でありました。今回は、浦安の明海大学で、鈴木和子さんの発表もあって欠席も考えていますが、ただ多方に大河内康憲先生の講演があるとおけばいけないかなと思っています。
要するに、この件は迷っているところです。
昨年のことをふり返ってみると、有坂氏の生誕一〇一年であったから引受けたわけで、一〇〇年のときであれば、そんな

2、

寒かましいことは私にはできませんでした。しかもこの年だけが貴兄のお手をわずらわせることができたわけで、本当に幸運でした。

まずお引越しのご予定をうかがって、今後のことを考えたいと思います。今でも火曜日にお三方が集まるときにうかがうのがよいでしょうね。

在仏の萩原久美子さんには『有坂秀世研究への序説』をEMSで送り、とどいたとの返事を受けとりました。『著述拾遺』は二月五日に発送したのですが、まだ返事がありません。EMSは追跡調査が可能だそうですが、まだもうすこしようすをみることにします。

ところで、平成元年に『著述拾遺』があがったときに、私の指導生であった皆さんには一本を呈上しました。『語勢沿革研究』は、中村氏の「序」にすれば、授業の中心になったとのことですから、吉池、中村両氏はお持ちでしょうが、貴兄はこの書をお持ちですか。以上の三点について、念のためうかがいます。

一月のぐあいでは、二月はすごしやすいように思われましたが、最近の寒さにはほとほと閉口します。おからだ大切になさって、新天地へ赴いて下さい。

右、とりあえず、一筆認めました。

ご健勝を祈念しつつ。

敬具

3、

二月十五

竹越孝様

慶谷壽信

【2010.4.6　吉池宛】

1.

拝啓　清明の候となりました。
ご清祥にておすごしのことと存じます。
さて、貴学訪問の件、竹越氏の日常がはっきりしてからにしようと思って、時間がすぎました。いまからでは、四月前半はむずかしそうです。四月、五月のゴールデン・ウィークは、空いていると思いますから、宿泊の手配などのことも考えて、五月後半になるでしょうか。
そのときには疲れを避けるために三日の行程を考えています。
一日目、名古屋到着　二日目、貴学訪問
三日目、名古屋発～帰宅
のようです。竹越氏の週末のぐあいによっては、日曜日に貴学訪問ということになりますが、日曜日に学内に入れるでしょうか。
ところで、『日本語学大辞典』（東京堂出版）の「有坂秀世」項目を依頼されました。大島先生にみていただきましたが、六回目の手術の直後からしく、加筆・訂正はしていただけませんでした。
皆さんにご迷惑をお願いします。字数は一二〇〇字です。ほかに書きたいこともありましたが、結局、削りました。
『国語学大辞典』の執筆者は、金田一春彦先生です。「文献」のところには、亀井孝先生作の「略年譜」、「著作論文年表」が挙げていますが、『上代音韻攷』の鈴木直喜男氏作のそれともに、まちがいがあり、載せませんでした。『有坂秀世研究―人と学問―』の「有坂秀世博士略年譜稿」に従う

2.

べきだと思いますので。
それでは、よろしくお願いいたします。
ご健勝を祈りつつ。
敬具
四月六日
慶谷書信
吉池孝一様

【2010.4.6　竹越宛】

拝啓　清明の候となりました。
ご清祥にておすごしのことと存じます。
さて、神戸外大の授業は、まだこれからだと思います
が、何曜にわかけて、何曜の何時ごろに帰る。という自覚が
わかるようになりましたら、お教えください。それにすべて
旅の日程を考えようと思いますので。
ところで、『日本語学大辞典』（東京堂出版）の「有坂
秀世」項目、一二〇〇字の執筆を依頼されました。大島
一郎先生にみていただきましたが、六回目の手術直後ら
しく、加筆、訂正はしていただけませんでした。
皆さんにご叱正をお願ひします。ほかに書きたいこともあ
りましたが、結局、削りました。
『国語学大辞典』の執筆者は、金田一春彦先生です。
〔参考文献〕のところには、京助先生作の「略年譜」、著作
論文年表」が挙げていますが、鈴木直喜男氏作の『
上代音韻攷』のそれとともに、まちがいがあり、載せません
でした。『有坂秀世研究―人と学問―』の「有坂秀世博士
略年譜稿」に従うべきだと思いますので。
それでは、よろしくお願ひします。
ご健勝を祈ります。

敬具

四月六日

竹越孝様

慶谷壽信

【2010.4.13　吉池宛】

拝復　寒暖定めなきこのごろですが、
ご清祥にておすごしのこと存じます。
さて、貴信拝受いたしました。いろいろとお気づかいいただいて恐れ入ります。
竹越氏は木曜夜に長久手にもどられるということですから、私の方では、木曜に
名古屋到着、金曜に貴学にうかがって、土曜に名古屋発ということにしたいと
思います。もう四月も半ばになってしまいましたから、宿の手配のこともあり、
五月三十一日から六月二十九日まで、貴学訪問は五月二十八日(金)ということで
よろしいでしょうか。宿所は、ホテル ビラ玉山(旧料玉山荘)を考えています。
(京都の学会のときと同じように、介護人(きです。)千種から長久手まで、
そう不便でもないように思いますが、どうでしょうか。
五月二十八日(金)でよければ、申しわけありませんが、玉山荘に五月三十日(木)、
五月二十八日(金)、ツインを頼んでいただけませんでしょうか。一刻も早く方が
安全と思い、厚かましいお願いを致します。
それでは、よろしくお願い致します。
ご健勝を祈りつつ。
四月十三日　故具

○三月 金 一日 時間あり
○明後日も、ご一緒願う。
○後にまたすぐ切起床

【2010.4.16　吉池宛】

1.

拝復　四月も半ばをすぎようというのに、まだ寒い日です。
明後日より常態に復すということですが、どうなりますか。
老人は不平が多すぎるようですね。
ご清祥にておすごしのこと存じます。
さて、貴信拝受しました。
竹越氏の日程だけ考えて、金曜日に貴学訪問としましたが、お二人のごつごうを考えていなかったのですね。
金曜日は、ごつごうがいかがですか。ほんのい時間でいいのですが。
木曜日名古屋着、金曜日貴学訪問、土曜日帰路につくという日程は、土曜日の宿泊がとりにくいという理由のほかに、そのうの日曜日に団地の共同作業の草取りがあるかもしれないからです。草取りの日程は、はっきりしません。おそらく五月九日(日)ごろに総会があり、それから新しい理事会が活動をはじめます。草取りの日は、早くて五月二十三日(日)、普通だと五月三十日(日)になるでしょう。一昨年、私が所属した理事会では、五月をとばして、六月から草取りをはじめました。そういうこともありますが、できれば、三十日(日)は、はずしたいと思います。
宿舎の件、昨夫の宿舎を使わせていただけるのは、ありがたいことですが、愛知県主大訪問は一日だけで、その前日の滞在は別としても、用件がすんだ後の滞在は、学校側からみて、おかしいのではありませんか。それに今回は介護人として家内をつれています。私一人ならいいかもしれませんが、そういう例はないでしょう。

もとにもどって、金曜日がだめなら、家内は草取り用員に残して、私一人だけでおかけます。心臓発作などがあるわけではありませんから、自分としては気になるところがありますが、結果として問題なしということを願いながら。

五月二十二日(土)を含む週と五月二十九日(土)を含む週のどちらでもかまいません。宿を予約するのに後の方がよいと思ったからにすぎません。

金曜日が可のばあい、五月二十日(木)、五月二十一日(金)の二日をルブラ王山にツインで、あるいは五月二十六(木)、五月二十七日(金)の二日をツインで予約していただけませんでしょうか。

もし金曜日が不可のばあいは、五月二十一日(金)、五月二十二日(土)の二日をルブラ王山にシングルで、あるいは五月二十八日(金)、五月二十九日(土)の二日をシングルで予約していただけませんでしょうか。土曜日は、結婚式場のある宿所は、ないことが多いので、予約できなければ、その時考えます。

なお、家内をつれていくときには、おじゃまであろうと思い、愛知県を大に帯同いたしません。四年間、名古屋にいたわけですから、多少は知りあいがいます。

いろいろと不手際で申しわけありませんが、すべてお願いいたします。

ご健勝を祈念しつつ。

敬具

四月十六

吉池孝一様

慶谷壽信

【2010.4.19　吉池宛】

1.

拝復、一昨日には雪が降りました。昭和四十四年四月十五日以来、四十一年ぶりの雪だそうです。当時、私はM.Mラインのニオス号に乗船してネパールに向かうため、香港あたりにいました。アポロの月面着陸があった年です。十月にもどりましたから、春の寒さを知りませんでした。

ご清祥にておすごしでしょうか。

さて、貴信四月十五日に拝受しました。

ホテルルブラ王山の宿泊を五月二十五日(木)二十八日(金)の三日、ツインでご手配いただき、ありがとうございました。

愛知県立大には二十八日(金)におじゃいたします。家内の方は、千種東住宅の旧住人と会うつもりであると話していましたが、電話でお話しをうかがってからは、まだ相談しておりません。この件、しばらくお待ち下さい。

ところで、四月九日に名古屋大の田村加代子氏から名大中国語学文学会で話をしてくれと頼まれました。昨年の十月から半年かけて打合わせして、やっと五月に愛知県立大を訪問するのに比べて、急すぎるとはいいましたが、五月の疲れが出て、体調が思わしくないときには、急に中止することもあるかもしれないということを認めてくれましたので、引受けました。

六月二十六日(土)一時から会があります。とりあえず、「言語学者有坂秀世の生涯」ということにしました。一時間ほどでとても生涯を話すことはできませんが、ポイントをしぼります。

やはり、二十五(金)到着、二十六(日)帰宅の三日行程とします。二十六(日)に団地の草取りがあるかもしれませんので、

2.

介護人がします。

それでは、よろしくお願いいたします。

ご健勝を祈り。

四月十九日

敬具

慶谷壽信

吉池孝一様

【2010.5.11　吉池宛】

1.

拝復　薫風の候となりました。ときに寒暖の差はありますが、ひところよりすごしやすくなりました。田村さんと手紙のやりとりをしていた四月中ごろから、調子が悪く、すこし心配していましたが、ここのところ、すこしよくなって、昆大訪問は、なんとか遂行できそうです。

皆さんお元気におすごしですか。

さて、貴信、本十日に拝受いたしました。王山から車で昆大まで、どのくらいごめいわくをかけるか想像できませんが、立てていただいた計画にすっかり甘えて動きます。家内の方は、まだ人と連絡をとっていませんが、二、三計画を立てているようですので、私と別行動となります。

ところで、多天中国語学文学会には会員でないとお伺できないかとたずねましたところ、この機会にオープンにしたらということでしたので、中哲のい守郁子佐野名治両氏、言語学の丹羽一彌氏に案内状をもってもらうことにしました。そのときに、昆大の皆さんにも案内状をさしあげましょうかとたずねられましたので、私が呼びつけるような形になって気がひけますが、とにかく案内状が五月中旬にお手もとにとどくと思います。六月二十五(土)一時からとなっています。

お礼をひとこと申しあげただけなのに、皆さんにごめいわくをかける旅となって申しわけありません。

よろしくお伝え下さい。

とりあえず、正誤表を入れました。これをどう処理するかは、おめにかかってからのことにしたいと思います。

2.

ご健勝を祈念しつつ。

五月十五

吉池孝一　様

敬具

慶谷壽信

慶谷壽信『有坂秀世研究―人と学問―』（古代文字資料館、二〇〇九年九月）

正誤表

p.8 下段注8	最終行	当って→当って	
p.129	14行	深く研究し→研きすし右にずらす。	
p.228 上段	8行	橋士博本→橋本博士。	
p.335	20行	現想→理想。	
p.397「あとがき」	8行	私は将来→私は、将来（はの後に「、」を入れる。）	
p.398「〃」	2行	論文→論文。	

【2010.5.14　吉池宛】

前略

前便でまちがったところ、補足すべきところがありました。

「千種から長久手」と書きましたが、正しくは「地下鉄池下から長久手」です。以前千種東住宅という公務員住宅にいたことがあり、それで地下鉄の駅が「千種」であるとしてしまいました。住宅は池下の近くでした。

「キテルルブラ王山」とか「王山荘」とかは、名古屋学校共済組合の宿所です。名古屋学校に勤めていられるから、毎月、名古屋学校共済組合のパンフレットをごらんになっていらっしゃると思って、有略しました。ご存じなければ、愛知大学の事務局でもすぐわかると思いましたが、書き添えるべきでした。

Tel.（〇五二）七六二―三一五一です。

五月二十八日の可否を知ってから、私の方で手配すべきなのですが、宿がとれないとふりかえしにもどると思って、厚かましく手配もお願いしてしまいました。申しわけありません。

ご健勝を祈念致します。

五月十四日　不悉

【2010.5.25　吉池宛】

拝啓　小満の候、清祥にておすごしのことと存じます。

さて、いよいよお発の日が近づきました。元気ハツラツとゆかにはいきませんが、どうやら可もなく不可もなくの状態でおかけられそうです。

ところで、五月十日付の貴信によりますと、

ルブラ王山　二時出発―愛知県美大―竹越家四時半

―七時ルブラ王山に向け出発

とあります。王山から県美大までどのくらいの時間がかかるのかわかりませんが、二時出発ではすこしおそいのではありませんか。この点、二十九到着後に電話でうかがうことにいたします。

右、とりあえず一筆認めました。

ご健勝を祈念しつつ。

五月二十九　敬具

【2010.5.31　吉池宛】

拝啓　御地とは違って、東京はまだ気温の低い日がつづいています。

その後、お疲れも出ず、お元気におすごしでしょうか。私の方は、名古屋滞在中は身体の節々が痛む状態でしたが、昨日の草取りをすませてからは、すこし快方に向かいそうです。

このたびは、私のこだわりから、貴重なお時間を消費させた上、いろいろとお心づかいをいただいてありがとうございました。厚くお礼を申しあげます。

ところで、二十八日、二時すぎから徳川美術館に行くといっていた家内は、リニアに乗って豊田のミュージアムに行ったそうで、竹越氏のところへ行く途中で、それがあるのに気づいてきました。二十九日に、私は直行するつもりでしたが、亀島のノリタケ美術館をねだられて、ひるすぎの列車に乗り、五時に帰宅しました。

右、とり急ぎ一筆お礼を認めます。

ご健勝を祈念しつつ。

五月三十日　敬具

吉池孝一様　　慶谷壽信

【2010.6.1　竹越宛】

拝啓　今日は好天ですが、気温の低い日がつづいています。
その後、お元気にお過しでしょうか。おうかがいいたします。
さて、このたびは、私のこだわりで、貴重なお時間を消費
した上、いろいろとおべつかいをいただきまして、ありがとう
ございました。厚くお礼を申しあげます。
神戸外大への往復は、からだにもこたえ、時間もかかり、
費用もかかって、大変なことと存じます。どのような
ご事情があるかは存じませんが、ご健康をそこなわぬ
ようにくれぐれもご自愛下さい。
右、簡単でございますが、とり急ぎ一筆お礼まで。
奥様にすろしくお伝え下さい。
ご健勝を祈念しつつ。

敬具

六月一日

慶谷壽信

竹越孝　様

【2010.6.22　吉池宛】

拝復　いよいよ夏至の候、暑くなります。
ご清祥にてお過しのことと存じます。
さて、はじめから泣き言になりますが、授業をしなくなってから五年間、
大きな声を出すこともありませんでした。
二十六日の原稿を試しに読んでみましたら、声は出ない、原稿を読み
方がうまくまわらない等の惨状で、今、しゃべる練習をしています。
そのため、ご返事が書けておりません。私としては責任は自分に
あり、編集部の正誤表で責任を押しつけるわけにはいかないと考えて
います。
正誤表をこのままとするにしても、私の謝罪文をつける必要が
あると考えています。二十六日以降の課題とさせて下さい。
ご健勝を祈りつつ。

六月二十二日

敬具

【2010.7.7　吉池宛】

暑中おみまい申しあげます。いかがおすごしですか。おうかがいします。
さて、全大中国語文学会のときには、不良なお別れをしてしまい申しわけありませんでした。
帰ってから、加藤国安教授へ礼状を書いたりしているうちに、すっかり疲れがでてしまい、その後はぐったりそして骨休みをしています。この夏中に五誤表のことを処理できるのかと心配ですが、もうすこし急ぎて、これば、元気もでることでしょう。
田村氏からは一覧に供した重松書簡の第二葉が脱落しているので、カラーコピーをとって送れ、とのご指示があって送りました。一覧に供するものは原稿用紙のわくの色彩を保存するために、カラーでとったらしいのです。
一段落したら、重松書簡1部、「学習院一覧」2部、都大方言学会発表要旨2部、都大方言学会パンフ・アウト2部がお手もとにとどくと思いますので、しばらくお待ちください。「学習院一覧」では、高等部に永島榮一郎先生、初等科に三宅徳嘉先生の名がみえます。中村氏は三宅先生をご存じでしょうか。
右、おそまきながら、ご子さんのおわびまで。七月　敬具

【2010.7.15　吉池宛】

1.

暑中おみまい申しあげます。
その後、お元気におすごしですか。
さて、昨日、貴信と正誤表の印刷とを拝受しました。私がギヤギヤしていたために申しわけありません。早速にご手配いただき、ありがとうございました。
「古代文字資料館」の名で出されるものには、私が名かく口をおすべきではないのですが、もしお許しをいただけるなら、赤字を入れたようにしていただけませんでしょうか。
「博」の字は、昨年の校正ですっかり目が悪くなって、拡大鏡を使っても、いまは判読できなくなりました。昨年の十月以来、白内障の進行をおくらせる目薬を医者からもらっています。橋本進吉氏の記念論集は旧字体で書かれています。
ところで、正誤表の送付についてですが、刊行当時に返事をもらったものは、私が手書きの通信文を添えることにします。ただし、おことばにあまえて、図書館等へは、古代文字資料館より送っていただければ、ありがたいと思います。
それから、何の返信もなかった（年賀状での付言をどうするかは、まだ考えてありません。）人々に対しては、
図書館あつかいにしてお願いできますか。
今回、郵送料は私に負担させて下さい。

個人情報のため削除　古代文字資料館

田村加代子氏の件は、明日にでも手紙を書いて催促

2.

することにします。

すっかり急けて、申しわけありません。おわび申しあげます。

以上、お礼とおわびまでに。

ご健勝を祈りつつ。

敬具

七月十九

慶谷壽信

吉池孝一様

【2010.7.22　吉池宛】

拝復　本当に暑いですね。

さて、石碑表を作りなおして送ってくださってありがとうございました。厚くお礼を申しあげます。

ところで、図書館等への石碑表の送付は、貴研究費からということで申しわけなく思います。たとえば、多摩市図書館の受領書は、表が書いたのと違った住所で貴資料館あてにとどきました。若干検討を要するものがあります。

図書館に準ずるあつかいの人々は、かなりあるようですが、本当に研究費からでいいのですか。

目下、加藤、田林氏からの依頼で「言語学者有坂秀世の生涯」を原稿化しています。もちろん原稿はあったのですが、説明やハンドアウトを工夫に合めたり、注にしたりしていますのでずいぶん時間がかかります。それで、本格的なことは、もうすこし待っていただけませんか。

なお、お礼とお願いまでに。

ご健勝を祈りつつ。

七月二十日　敬具

【2010.8.3　吉池宛】

暑中おみまい申しあげます。
猛暑中かつづいておりますが、いかがおすごしですか。

さて、このほど、刊行から一年近くになって、やっと正誤表をお送りする段取りとなりました。
「あとがき」に「缺陥だらけの過去の仕事の再發表」などと、せめて誤植の訂正と若干の補修をおこなったことでもお許しを賜わることができたら幸いであると記しましたのに、まったく面目次第もないことでございます。心からおわび申しあげます。
右、まずは一筆、おわびまで。
ご健勝を祈念しつつ。

八月三日　　敬具

慶谷壽信

吉池孝一様

各位

先般送付申しあげました当館発行『有坂秀世研究―人と学問―』（慶谷壽信著、二〇〇九年九月）につき、左記のとおり訂正および付加がございます。
お手数をお掛けして恐縮ですが、ご訂正のほど宜しくお願い申しあげます。

古代文字資料館

――記――

慶谷壽信著『有坂秀世研究―人と学問―』（古代文字資料館、二〇〇九年九月）

■正誤表

・八頁下段　注8最終行　　当って → 当つて
・二八八頁上段八行　　橋士 → 橋本　博本 → 博士
・三三五頁二十行　　現想 → 理想
・三九七頁「あとがき」八行　　私は将来 → 私は、将来
・三九八頁「あとがき」二行　　論文 → 論文　＊字体訂正

■付加

・七二頁下段補(3)の「上野の国立国会図書館分館」に対する編集者補として、同頁末尾に左記を付加。
【編集者補】国立国会図書館が所蔵する国内博士論文のコレクションは、平成14年（2002）の国立国会図書館関西館（所在地は京都府）の開館にともない、こちらに移管された。

【2010.8.12　吉池宛】

残暑おみま申しあげます。

さて、お手紙、八月九日に拝受いたしました。

少しずつ準備を進めておられるとのこと、お手数をわずらわすことになるので、ごゆうのよいときにお進め下さい。私の方は平通ほどで、あまりはかどってはおりません。

個人のリストは後日作りますが、まずは図書館等からお願いいたします。その中で、多摩市図書館は私が持参しますから除外して下さい。それから、名大中国語文学会の原稿と（巻末）いっしょに名大図書館分（三枚）を送りましたので、名大図書館（巻末）も省略して下さい。

乱筆乱文をお許し下さい。

ご健勝を祈り乍ら。

八月十二日　敬具

【2010.8.23　吉池宛】

拝啓　いまなお、厳しい暑さがつづいていますが、ご清祥にておすごしのこと拝察致します。

さて、正誤表の送付は炉を越えましたが、まだしばらくつづきます。年賀状で受領を記した人も、私が書くことにします。それで、全部合わせて二〇〇通くらいになります。

石村広氏、本間猛氏からは返送されて来たので、年賀状を調べて、送り直しました。まだ返事はありません。

東京信愛教会は、牧師の名もわかりましたので、私が出しました。鈴木病院理事長は、私が直接とどけましたので鈴木病院百周年記念のことからあわせて、手紙を出す予定です。

団体の中に

〒二一〇―〇〇〇七
東京都名東区上野芝園七―三―二
日本学士院

を加えていただけませんか。

それで後は、応答なしの個人が残るのですが、私には予想もできない人々が含まれていて、しかも九〇通になりそうです。一応、リストを挙げておきますが、だめでしたら、おことわり下さい。

1.

次項２のリストは省略

3、

できたらお願いしたいとは思うのですが。

ご健勝を祈念しつつ。

八月二十三日

敬具

慶谷壽信

吉池孝一様

【2010.8.26　吉池宛】

1、

拝復　本当に暑い毎ですね。でも、まだ（ばらずに、なんとかつづいています。

さて、八月二十三日付の貴信、拝受いたしました。応答なしの個人をあつかって下さるとのこと、本当にありがとうございます。また、申しわけありません。

私の八月二十四日付の書信といきちがいになったようです。そこに八十九名の「応答なし」を挙げましたけれど、今回、お送りいただいたリストと照合しましたら、私のメモには

個人情報のため削除　古代文字資料館

なお、寺田泰政氏から自分の名が誤字になっているとのご指摘がありました。

P.276、先行の小山正著、寺田泰正×増補です。

P.263の本文中には、小山正著、寺田泰政増補と正しくなっています。

「文献目録」のところは、ごめんを願うか、あるいは訂正するかですが、いまの「正誤表」を訂正できますか。できなければ、しばらくごめんしてもらうことにしましょう。

今回、「応答なし」を助けて下さったこと、心からお礼を申しあげます。

右、まずは一筆、お礼とお願いまで。

2.

ご健勝を祈念しつつ。

八月二十六日

吉池孝一様

慶谷壽信

敬具

【2010.9.9　吉池宛】

1.

拝復　白露の候、いまだに暑い日がつづいています。
ご清祥にお暮しでしょうか。
さて、先日は、寺田泰政氏の申し出を早速追加して
下さって、ありがとうございました。
まだ本格的に送付するにはくたびれていますし、さらに
誤植がみつかるともいけないので、全体に対してはしばらく
このままにしておこうと思います。ただ、ときどき手紙を出す人、
たとえば、大島一郎先生などには、改めて送ろうと思います。
応答なしの人々がたくさんあって、お疲れだったでしょう。
本当に申しわけありませんでした。
泰政氏の訂正を送った人は、別に書きとめておいて下さい。
何か通知するときに、そうでない人には同封しますから。

名大中国語文学会の会報の原稿は、二校をすませて
責了としました。もう一回校正があるように聞いていましたが、
全体がおくれているようで、ここまでとするようです。
さかしものをしていて、有坂さんの手紙を教科書と対比した
ものがみつかりましたので、同封します。すでにお持ちでしたか。
「大正大学の有坂秀世講演」のハンドニュートをお持ちだった
のには、びっくりしました。

万事粗忽にすぎたることをおわびします。
ご健勝を祈念しつつ。

敬具

2.

九月九日

吉池孝一様

慶谷壽信

【2010.9.16　竹越宛】

1.

拝啓　すこし前までとは打って変って、秋らしい日となりました。
ご清祥にておすごしのことと存じます。
ところで、京代文字資料館の研究会は、まだ毎週続けていらっしゃいますか。そうであれば、不必要となるのですが念のため新しい正誤表をお送り致します。
はじめの正誤表は、愛知県立大訪問のときに作ってあって、ほぼ八月一杯かかって送付しました。そのほぼ全部が終りころになって、寺田泰政氏より自分の名がまちがっているとのお叱りを受けました。
「上代特殊仮名遣研究史の概略」の
P.263 最終行　本文では、小山正著、寺田泰政増補、と正しくなっているのですが、文献目録のところでは、
P.276 四行　小山正著、寺田泰正増補　と誤っているのです。
これまでのすべての人にあわせて多すぎるのことはなかったと思われるのですが、吉池氏が新しい正誤表を作ってくれました。何かのことで、手紙を書く機会があるたびに、同封しようと思っています。
もう一つは有坂氏の手紙で、『著述拾遺』にのっているので、うっかりしたものではありませんが、自筆の手紙と教科書とが対比してある点がすこし違います。
このほど、さがしものをしているときに、いっしょにみつかりましたので、同封致します。
「やがて沛風も立ち初めることでしょう。」という状況になりましたら、この夏の猛暑の疲れをお休め下さい。

ご健勝を祈念しつつ。

九月十六日

竹越孝様

敬具

慶谷壽信

各位

先般送付申しあげました当館発行『有坂秀世研究―人と学問―』（慶谷壽信著、二〇〇九年九月）につき、左記のとおり訂正および付加がございます。お手数をお掛けして恐縮ですが、ご訂正のほど宜しくお願い申しあげます。

古代文字資料館

――記――

慶谷壽信著『有坂秀世研究―人と学問―』（古代文字資料館、二〇〇九年九月）

■正誤表

・八頁下段 注8最終行　当って → 当つて

・二七六頁四行　寺田泰正増補 → 寺田泰政増補

・二八八頁上段八行　橋士 → 橋本　博本 → 博士

・三三五頁二十行　現想 → 理想

・三九七頁「あとがき」八行　私は将来 → 私は、将来

・三九八頁「あとがき」二行　論文 → 論文　＊字体訂正

■付加

・七二頁下段補(3)の「上野の国立国会図書館分館」に対する編集者補として、同頁末尾に左記を付加。

【編集者補】国立国会図書館が所蔵する国内博士論文のコレクションは、平成14年（2002）の国立国会図書館関西館（所在地は京都府）の開館にともない、こちらに移管された。

【2010.9.29　吉池宛】

1.

拝復　ひところの猛暑がうそのようで、すっかり冷えこむ秋となりました。

ご清祥にておすごしのこと存じます。

さて、貴信、昨二十八日に拝受しました。

旧、新の正誤表を多数お送り下さって、ありがとうございました。

篠崎氏は、『国語年鑑』によって本を送りましたが、その後転居したのでしょうか。『著述拾遺』がきたときには、簡単な書評を『言語』に書く人なのに、応答がないのがそもそもおかしいのです。詳しい書評は、徳川宗賢氏が『音声学会』の機関誌に書いて戴くことになっていましたが、結局、実現しませんでした。

鄭恵先氏の行先は、心あたりに聞いてみます。わかったらあわ、私から送ります。

林健太郎氏は、そのままにしましょう。大島一郎先生の近くで、いまはそこに住んでいらっしゃるように思うようでした。

大岩秀紀氏は、長崎外大の人で、私の『英語学大事典』(二三冊欠)をもらってもらった人です。住居あてに本を送ったときにもどって来たので、長崎外大あてにまた送っていただきました。今春には徳島文理大に移ったというがキャンセルもくりたので、そのことを早くお知らせする。きで、申しわけありません。すこしたら、私から徳島の方に申してみます。

ところで、十月の中国語学会には参加されますか。そのさいに新しい正誤表をまだ受けとっていない、応答がしの人々に渡していただけませんでしょうか。

2.

私も自分が送付した人々に対してそうするつもりですが、これからは、国語学、言語学の人々に新しい正誤表を送付する予定です。いま、すこし疲れが来ていますが、そうもいっていられません。老人には急な変化がこたえるのですが、先日受けた市民健康診断では、コレステロール値などを除いて、ほぼ問題なしでしたから、ギワギワやります。

それでは、お元気におすごし下さい。

右、まずは一筆、お礼まで。

敬具

慶谷壽信

九月二十九日

吉池孝一様

【2010.10.14　吉池宛】

拝復　寒露の候となりました。
ご清祥にておすごしのことと存じます。
さて、書信、十月旨に拝受しました。
正誤表、づけて送っていただいて、ありがとうございました。
KOTONOHAのあて先は一応限られると思いますが、
後に残ったものをどうするかは、まだ考えることにいたしましょう。
私の方は、国語学を中心に約五十通ほどが送付ずみです。
第一回のときほど集中してはできませんが、ギワギワ送て、
学会のころには百五十通までいくかもしれません。
その後もづける予定です。
右、お礼かたかた、ご報告まで。
ご健勝を祈念しつつ。
十月十四
敬具

【2010.10.27　吉池宛】

拝啓　霜降の候となりました。
ご清祥にておすごしのことと存じます。
さて、正誤表の送付、学会での手渡しとしなくてもなんとか
手紙で済ませる見込みがたちました。
ところで、加藤千代さんから転居の通知が来ましたので、本体から
とどいているかどうか、私の方から聞きがてら、新正誤表を送ります。
それから、最近になって受領の通知が来た大鳴房美（鮫澤
孝子両氏にも私の方から送ります。（大谷秀紀氏も）
以上、簡単ながらお知らせまで。
ご健勝を祈念しつつ。
十月二十七
敬具

【2010.11.1　吉池宛】

拝復　秋冷の候となりました。
ご清祥にておすごしのこと存じます。
さて、貴信、十月二十九日に拝受しました。
このたびには増刷をして下さるとのことでありますが、ただ形式的にせよ著作権は私にあるのですから、これこれの形で増刷をしたいと思うが、どうか、と予私の意向を問うていただくのが筋ではありませんか。水谷先生のように『大唐西域記』訳注の増刷を承諾せず、注を削って、ただ訳のみの増刷を承諾したという例があります。
今回は受領の応答さえしない多くの個人に私が贈呈したために、全国の大学図書館等に送付する分が少なくなったという事情があるでしょうから、特にそのために増刷が必要になったと思います。申しわけなくと思いますが、しかし形式的にせよ、筋は筋です。

誤植等の訂正は、もう一度確認しました。ただし、「正誤表」のきもゆっくり相談する機会がなかったのですが、有坂さんの学位論文の行方についての「付加」には『編集者補』とあります。「編集後記」を書いているのは竹越氏ですから、一般の人は「竹越孝補」の意に受けとると思います。これは貴兄の調査にもとづいていますから、「吉池孝一補」とするべきではありませんか。
それから、「本書〜ページ」の点ですが、この担当者はどなたでしょうか。私も気を付けて照合しましたが、担当者が最も適任です。「本書〜ページ」が誤っていないかどうか、確認する必要があります。
あと二点、⑨、⑩を記しました。

コクヨ　ケイ-20

3、

図書館等寄贈先は、文献の参照で特にお世話になった東大中央図書館、早大中央図書館、およびそれに準ずるもの（大正大学、国学院大等）のほかは、私が非常勤講師をつとめた大学にお願いしました。皆さんが必ず賜るだろうと思った都矢図書館や中文研究室は含めてありません。都矢図書館、中文研究室がはずれることはないと思いますが、必ず含めて下さい。
それから私に二、三冊。私は、これまで論文抜刷に「有坂秀世先生指正」と書き、それを保存してきました。もう後何年生きるかどうかわからないときですから、今回は「有坂秀世先生指正」と書くかどうかわかりませんが、有坂さんに献呈するものを含めて、私分とその余備で全三冊です。
右のほかに藤田良雄先生に一冊。本書は藤田先生の生誕百一年記念でもあります。まちがいなければ私の手紙を貴兄のもとに送りますので、それを封入してただけませんか。有坂秀世先生ご夫妻はすでにおなくなりになっているので、その子の有坂夏子氏には正誤表つきの初刷でいいでしょう。
形式的に筋論をのべましたが、今回もお手数をかけ、お世話になります。印刷代その他、私が負担したと申しましても、そのおつもりはなく、ことを進めてくれると思います。今回も深謝の気持をもっておまかせします。
それでは、よろしくお願いします。
謝礼筆記文。
ご健勝を祈念しろ。

敬具

十月一日

吉池孝一　様

慶谷壽信

コクヨ　ケイ-20

各位

先般送付申しあげました当館発行『有坂秀世研究―人と学問―』（慶谷壽信著、二〇〇九年九月）につき、左記のとおり訂正および付加がございます。お手数をお掛けして恐縮ですが、ご訂正のほど宜しくお願い申しあげます。

古代文字資料館

――記――

慶谷壽信著『有坂秀世研究―人と学問―』（古代文字資料館、二〇〇九年九月）

■正誤表

①・八頁下段 注8最終行　当って → 当つて

②・二七六頁四行　寺田泰正増補 → 寺田泰政増補

③・二八八頁上段八行　橋士 → 橋本　博本 → 博士

④・三三五頁二十行　現想 → 理想

⑤・三九七頁「あとがき」八行　私は将来 → 私は、将来

⑥・三九八頁「あとがき」二行　論文 → 論文　＊字体訂正

■付加

⑦・七二頁下段補(3)の「上野の国立国会図書館分館」に対する編集者補として、同頁末尾に左記を付加。

【編集者補】国立国会図書館が所蔵する国内博士論文のコレクションは、平成14年(2002)の国立国会図書館関西館（所在地は京都府）の開館にともない、こちらに移管された。

⑧奥付

別紙 ⑨ P.10、注24 ⑩ P.129 14行

(10) 学士院の正式決定の通知は、二月十二日付であった。

(11) 全面的な検討は今後の課題であるが、一例として、拙稿「前史―石塚龍麿から有坂秀世まで―」（『中国語学』第二二八号、昭和五十六年十一月）pp.九一―九二（本書三八九―三八八頁）

(12) NHKラジオの第一、第二放送がボタン一つで選局できる。今日のカーラジオの先駆であるが、当時（大正十年ごろ）の状況ではとても商品化の見込みなく、やがて特許権を放棄した。

(13) 岡本次雄、木賀忠雄編『電波と共に―有坂磐雄伝―』（CQ出版、昭和五十五年四月）p.八。

(14) 有坂磐雄「航空通信及び航空電波兵器」参照。『航空技術の全貌(下)』（日本出版協同、昭和三十年一月）pp.二一七―二八五所収。

(15) 沢村亨「オーディオ小史〈その③補遺とエピソード〉」（『世界のステレオ』NO.3所収。朝日新聞社、昭和五十二年十二月。）p.一四一参照。

(16) 有坂秀世『語勢沿革研究』（三省堂、昭和三十九年十一月）p.VI、凡例2。

補

1 『國語音韻史の研究』の「後記」でも、なぜか「昭和十七年七月」となっている。『國語音韻史の研究 増補新版』（三省堂、昭和三十二年十月）も同じ。

2 原題は「下二段活用の補助動詞『たまふ』の源流について」であって、「（再考）」の文字はない。『國語音韻史の研究』に収められて「（再考）」とされるに至ったが、この書簡がそのさきがけをなすものである。昭和十四年十二月廿七日付で、大正大学長より教学局長官に提出された有坂秀世の論文目録（cf.前掲「大正大学の有坂秀世講師」【本書八頁】p.九〇）では、まだ「下二段活用の補助動詞『たまふ』の源流について」とされていた。

3 有坂氏の学位論文は、現在、上野の国立国会図書館分館に蔵されている。主論文は三省堂刊の『音韻論』（文23、3・1、三二三六五八）であり、参考論文として「アクセントの型の本質について」（『言語研究』第七・八号、昭和十六年四月）の論文抜刷（文23、3・2、三二三六五九）が添えられている。『音韻論』中、何個所かミス・プリントが訂正されているが、この個所はそのままである。従って、有坂氏は、少なくとも昭和十六年七月八日の時点では、まだこの誤りに気づいていなかった。

ここは入る。

〔附記〕

令兄有坂愛彦先生ご夫妻、令兄故有坂磐雄氏の夫人言子氏、長男英雄氏、日本学士院の鵜木亮一事務官にはいろいろとご教示を賜わった。

東京都立大学名誉教授で國學院大學日本文化研究所教授の平山輝男先生、東京都立大学教授大島一郎先生には、適宜、適切なるご指示を賜わった。

上智大学教授金田一春彦先生にはご架蔵の有坂秀世書簡集、有坂敏子書簡集を使用させていただいた。

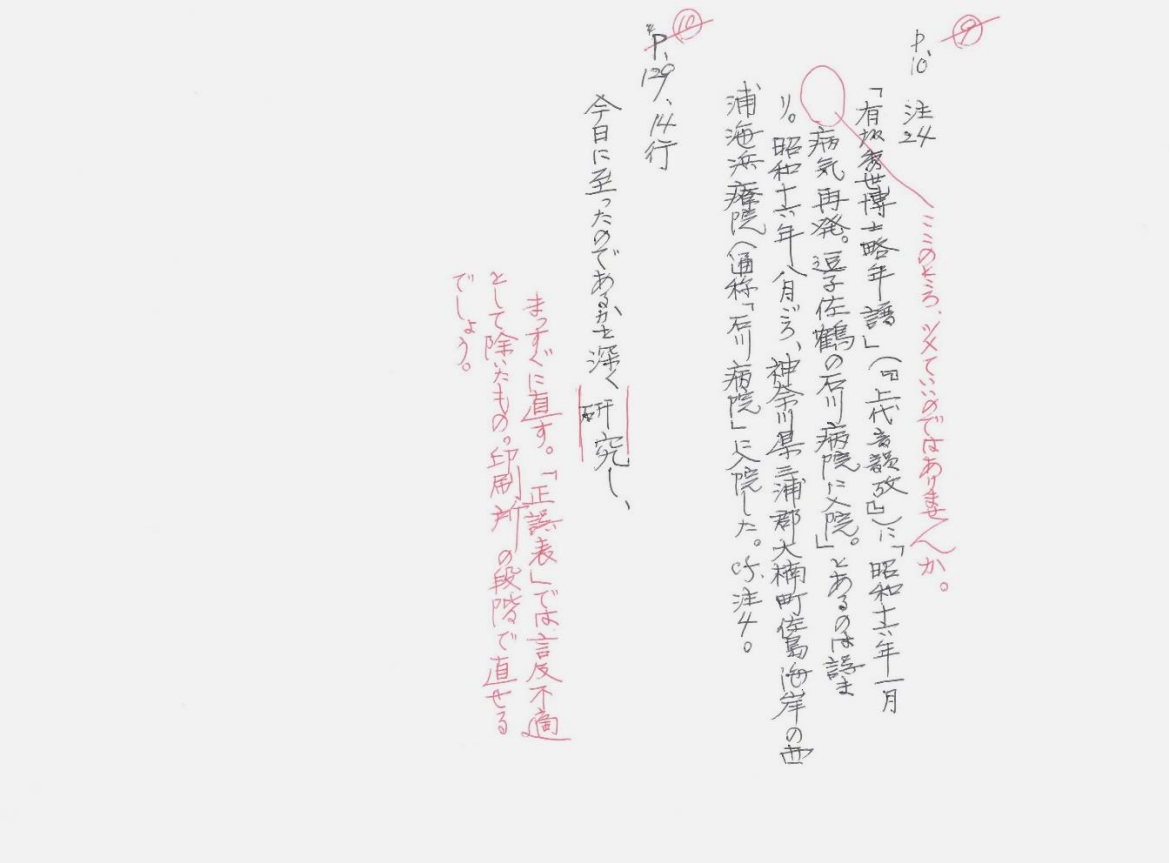
記して感謝の意を表する。

（有坂博士三十三回忌を前にして、十二月十二日書き終る。）

⑦

【編集者補】国立国会図書館が所蔵する国内博士論文のコレクションは、平成十四年(2002)の国立国会図書館関西館（所在地は京都府）の開館にともない、こちらに移管された。

吉池孝一



p.10 注24

「有加秀世博士略年譜」（『上代文学』）に「昭和十六年一月病気再発。逗子佐鶴の石川病院に入院。」とあるのは誤り。昭和十六年八月ごろ、神奈川県三浦郡大楠町佐島海岸の浦海浜療院（通称「石川病院」）に入院した。cf. 注4。

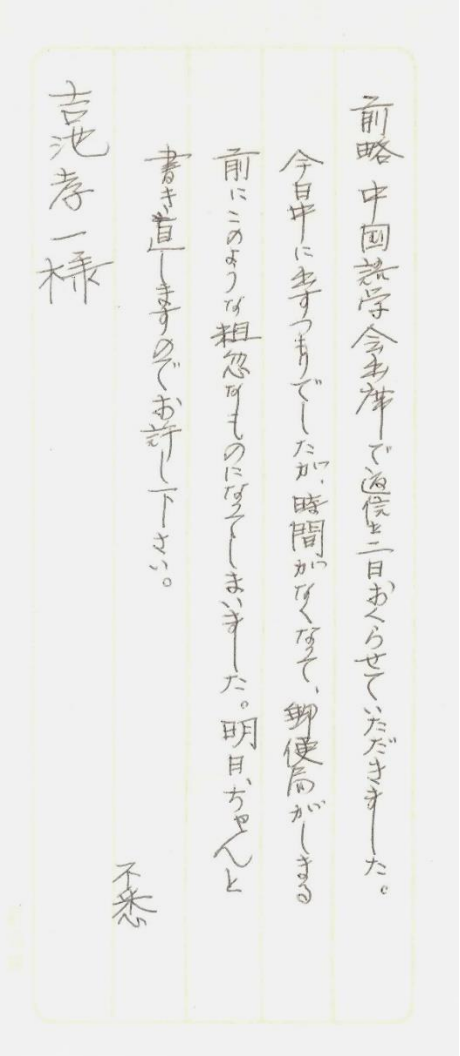
ここのところ、必ていらではありませんか。

p.129、14行

今日に至ったのであるかを深く研究し、

まずは直す。「正誤表」では言及不適として除いたもの。印刷所の段階で直せるでしょう。

【2010.11.15　吉池宛】



前略　中国語学会事務で返信を二日おくらせていただきました。

今日中に出すつもりでしたが、時間がなくなって、郵便局がしまる前にこのような粗忽なものになってしまいました。明日、ちゃんと書き直しますのでお許し下さい。

不悉

吉池孝一様

(10) 学士院の正式決定の通知は、二月十二日付であった。

(11) 全面的な検討は今後の課題であるが、一例として、拙稿「前史—石塚龍麿から有坂秀世まで—」(『中国語学』第二二八号、昭和五十六年十一月) pp.【本書三八九—三八八頁】九一—九二。

(12) NHKラジオの第一、第二放送がボタン一つで選局できる。今日のカー・ラジオの先駆であるが、当時(大正十年ごろ)の状況ではとても商品化の見込みなく、やがて特許権を放棄した。

(13) 岡本次雄、木賀忠雄編『電波と共に—有坂磐雄伝—』(CQ出版、昭和五十五年四月) p.八。

(14) 有坂磐雄「航空通信及び航空電波兵器」参照。『航空技術の全貌(下)』(日本出版協同、昭和三十年一月) pp.二一七—二八五所収。

(15) 沢村亨「オーディオ小史〈その③補遺とエピソード〉」(『世界のステレオ』NO.3所収。朝日新聞社、昭和五十二年十二月。) p.一四一参照。

(16) 有坂秀世『語勢沿革研究』(三省堂、昭和三十九年十一月) p.VI、凡例2。

補

(1) 『國語音韻史の研究』の「後記」でも、なぜか「昭和十七年七月」となっている。『國語音韻史の研究増補新版』(三省堂、昭和三十二年十月)も同じ。

(2) 原題は「下二段活用の補助動詞『たまふ』の源流について」であって、「(再考)」の文字はない。『國語音韻史の研究』に収められて「(再考)」とされるに至ったが、この書簡がそのさきがけをなすものである。昭和十四年十二月廿七日付で、大正大学長より教学局長官に提出された有坂秀世の論文目録(cf.前掲「大正大学の有坂秀世講師」【本書八頁】p.九〇)では、まだ「下二段活用の補助動詞『たまふ』の源流について」とされていた。【編集者補参照】

(3) 有坂氏の学位論文は、現在、上野の国立国会図書館分館に蔵されている。主論文は三省堂刊の『音韻論』(文23、3・1、三二三六五八)であり、参考論文として「アクセントの型の本質について」(『言語研究』第七・八号、昭和十六年四月)の論文抜刷(文23、3・2、三二三六五九)が添えられている。『音韻論』中、何個所かミス・プリントが訂正されているが、この個所はそのままである。従って、有坂氏は、少なくとも昭和十六年七月八日の時点では、まだこの誤りに気づいていなかった。

〔附記〕

令兄有坂愛彦先生ご夫妻、令兄故有坂磐雄氏の夫人言子氏、長男英雄氏、日本学士院の鶴木亮一事務官にはいろいろとご教示を賜わった。

東京都立大学名誉教授で國學院大學日本文化研究所教授の平山輝男先生、東京都立大学教授大島一郎先生には、適宜、適切なるご指示を賜わった。

上智大学教授金田一春彦先生にはご架蔵の有坂秀世書簡集、有坂敏子書簡集を使用させていただいた。

記して感謝の意を表する。

(有坂博士三十三回忌を前にして、二月十二日書き終る。)

【編集者補】国立国会図書館が所蔵する国内博士論文のコレクションは、平成十四年(2002)の国立国会図書館関西館(所在地は京都府)の開館にともない、こちらに移管された(2009.3.23現在確認。この項目は吉池が執筆)。

普通なら著書にするときは、この「附記」のようなものは削るのだと思いますが、私は、お世話になった先生方の御厚意と自分の記録のために、すべて残してあります。中村氏のご相談の結果でこのようになったので申しわけないのですが、上にのべた二つの理由と、それから、ここは「二月十二日書き終る」となっていますこと、二月十二日は学士院総会で授賞が決定した日ですし、これを最後にまわしたいと思います。

7

【編集者補】は〈附記〉の前に置いていただけませんか。粗忽な過ぎで申しわけありません。明日、ちょうど手紙を書きます。

7

だわる理由は、一つにはここにある。

注18　四兄有坂愛彦氏談。

注19　「国語学史」は必修であるのに、どうしてこのような措置をとりつづけることができたのか。宇井浩道氏は、文学部在学中、金田一教授の「国語学概論」を重ねて修得し、これを「国語学史」に充当した。便法が存したのである。

注20　『国文視野』第七輯（昭十六、七）所載の「先生御近況」には「お寒くなりましたが皆様御變りはいらせられませんか。私は御蔭を以て元氣で暮して居ります。數年來手にかけて居りました著書がやうやく出來上りましたので一息つきまして、今後當分の間は雑誌論文などで時々卑見を發表しながらだん〳〵と次の研究を纒めて行きたいと存じて居ります。何とぞ御指導御鞭韃下さいますやう御願ひ致します。皆様の御健闘を御祈り申し上げます。」（p.二六）とある。

注21　『上代音韻攷』は、昭和七、八年どろに書かれたとされている。「有坂秀世博士略年譜」（『上代音韻攷』）によれば、すっかり入院期間中だということになるが、じっさいにはその時期ずっと入院していたわけではない。なお、注4参照。

注22　『兵器考古代篇』（雄山閣、昭和十一年十月）、『兵器考砲熕篇一般部』（同、十一年十一月）、『兵器考近代篇』（同、十二年一月）、『兵器考砲熕篇 海軍砲熕小銃』（同、十一年十二月）、『兵器考近代篇』（同、十二年一月）。著述の意図については、昭和十五年二月十九日の「帝国大学新聞」に載った本人の談話参照。評価については、『日本学士院八十年史資料編四』（日本学士院刊、昭和三十八年一月）pp.四五五―四五六。

注23　当時、東京帝国大学名誉教授、工学博士、海軍造兵中将（退役）、帝国酸素株式会社社長。人類学会評議員、軍事史学会理事長。少年のころ、フェノロサ、エドワード・モースの家に遊び、明治十七年三月二日、東京大学予備門生徒のとき（十六才）、向ケ岡貝塚で弥生式土器を発見。明治三十年、海軍国産砲の嚆矢、呉第一号十二サンチ速射砲を創製。早熟の天才で、かつ晩成の勉励家でもあった。

⑨の1

注24　「有坂秀世博士略年譜」（『上代音韻攷』）に「昭和十六年一月病気再発。逗子佐鶴の石川病院に入院。」とあるのは誤まり。昭和十六年八月ごろ、神奈川県三浦郡大楠町佐島海岸の西浦海浜療院（通称「石川病院」）に入院した。cf.注4。

＊　＊　＊

「大正大学授業経過報告」（専門部高等師範科三年一組）

〈第一学期〉（総授業時数　十八時間）

教科書ヲ用ヰズ、スベテ講義ヲ筆記セシメ、之ニ就キテ詳細ニ説明ヲ加フ

マヅ國語學史ノ意義、目的ヲ説キ、國語學史ハ畢竟我ガ國民ノ自國語ニ對スル反省、自覺ノ歴史ナルコトヲ明カニス

次ニ、古代日本人ノ言語意識ヲ論ジ、原始人ガ素朴ナル神祕的言語觀ヨリ出發シテ、次第ニ言語ソノモノニ對スル客觀的觀察ニ進ミ、外國語トノ接觸ニヨツテ母國語ニ對スル自覺ヲ明カニシタルコトヲ示ス

漢字、漢文ノ輸入セラレタル次第ヲ述べ、我ガ國民ガヨクソレヲ咀嚼シ日本化シテ自己ノ思想ヲ表現スル手段ヲ作リ出シタルノミナラズ、ソノ過程ニ於テ自ラ自國語ノ諸性質ヲ自覺スルニ至レル事實ヲ明カニス

即チ、字音ノ輸入、字訓並ニ倒讀法ノ成立、固有ノ國語、國文ヲ漢字ニヨツテ寫シ出ス方法ノ發達等ニツキテ説明ス

萬葉假名ノ發達ニ伴ツテ自國語ノ音節組織ガ次第ニ自覺セラレ整理セラレテ、ツヒニ「あめつち」ノ歌ヲナシ、ツイデ大爲爾歌、「いろは」歌ヲ生ゼル所以ヲ説キ、ソレラノ國語學史的意義ヲ闡明

私の原稿と印刷のぐあいで、あきができたのでしょうが、現在読む人にとっては、そのようなゆきかかりは関係なく、⑨の2の方へ回して下さい。

注18　四兄有坂愛彦氏談。

注19　「国語学史」は必修であるのに、どうしてこのような措置をとりつづけることができたのか。宇井浩道氏は、文学部在学中、金田一教授の「国語学概論」を重ねて修得し、これを「国語学史」に充当した。便法が存したのである。

注20　『国文視野』第七輯（昭十六、七）所載の「先生御近況」には「お寒くなりましたが皆様御變りはいらせられませんか。私は御蔭を以て元氣で暮して居ります。數年來手にかけて居りました著書がやうやく出來上りましたので一息つきまして、今後當分の間は雑誌論文などで時々卑見を發表しながらだん〳〵と次の研究を纒めて行きたいと存じて居ります。何とぞ御指導御鞭韃下さいますやう御願ひ致します。皆様の御健闘を御祈り申し上げます。」（p.二六）とある。

注21　『上代音韻攷』は、昭和七、八年ごろに書かれたとされている。「有坂秀世博士略年譜」（『上代音韻攷』）によれば、すっかり入院期間中だということになるが、じっさいにはその時期ずっと入院していたわけではない。なお、注4参照。

注22　『兵器考古代篇』（雄山閣、昭和十一年十月）、『兵器考砲熕篇一般部』（同、十一年十一月）、『兵器考砲熕篇　海軍砲熕小銃』（同、十一年十二月）、『兵器考近代篇』（同、十二年一月）。著述の意図については、昭和十五年二月十九日の「帝国大学新聞」に載った本人の談話参照。評価については、『日本学士院八十年史資料編四』（日本学士院刊、昭和三十八年一月）pp.四五五―四五六。

注23　当時、東京帝国大学名誉教授、工学博士、海軍造兵中将（退役）、帝国酸素株式会社社長。人類学会評議員、軍事史学会理事長。少年のころ、フェノロサ、エドワード・モースの家に遊び、明治十七年三月二日、東京大学予備門生徒のとき（十六才）、向ケ岡貝塚で弥生式土器を発見。明治三十年、海軍国産砲の嚆矢、呉第一号十二サンチ速射砲を創製。早熟の天才で、かつ晩成の勉励家でもあった。

⑨の2

注24　「有坂秀世博士略年譜」（『上代音韻攷』）に「昭和十六年一月病気再発。逗子佐鶴の石川病院に入院。」とあるのは誤まり。昭和十六年八月ごろ、神奈川県三浦郡大楠町佐島海岸の西浦海浜療院（通称「石川病院」）に入院した。cf.注4。

＊　＊　＊

「大正大学授業経過報告」（専門部高等師範科三年一組）

〈第一学期〉（総授業時数　十八時間）

教科書ヲ用ヰズ、スベテ講義ヲ筆記セシメ、之ニ就キテ詳細ニ説明ヲ加フ

マヅ國語學史ノ意義、目的ヲ説キ、國語學史ハ畢竟我ガ國民ノ自國語ニ對スル反省、自覺ノ歴史ナルコトヲ明カニス

次ニ、古代日本人ノ言語意識ヲ論ジ、原始人ガ素朴ナル神祕的言語觀ヨリ出發シテ、次第ニ言語ソノモノニ對スル客觀的觀察ニ進ミ、外國語トノ接觸ニヨツテ母國語ニ對スル自覺ヲ明カニシタルコトヲ示ス

漢字、漢文ノ輸入セラレタル次第ヲ述べ、我ガ國民ガヨクソレラヲ咀嚼シ日本化シテ自己ノ思想ヲ表現スル手段ヲ作リ出シタルノミナラズ、ソノ過程ニ於テ自ラ自國語ノ諸性質ヲ自覺スルニ至レル事實ヲ明カニス

即チ、字音ノ輸入、字訓並ニ倒讀法ノ成立、固有ノ國語、國文ヲ漢字ニヨツテ寫シ出ス方法ノ發達等ニツキテ説明ス

萬葉假名ノ發達ニ伴ツテ自國語ノ音節組織ガ次第ニ自覺セラレ整理セラレテ、ツヒニ「あめつち」ノ歌ヲナシ、ツイデ大爲爾歌、「いろは」歌ヲ生ゼル所以ヲ説キ、ソレラノ國語學史的意義ヲ闡明

【2010.11.16　吉池宛】

1.

拝復　こよみの上で冬になっただけでなく、実質的な冬が到来しました。

ご清祥にておすごしでしょうか。

さて、貴信、十月十五に拝受しました。すぐご返事をしなければ、と思いながら、中国語学会のために、先に延ばさしていただきました。その翌日ご返事するにはしましたが、想念な手紙で失礼しました。

まず、十月五付の貴信に、正誤表九十七頁を再送付し終ったとのことに厚くお礼を申しあげねばなりません。

最終的に中国語学会大会の席上手渡しするということもなく、一応、送付し終りましたので、私の方にも何頁かまわしていただいて書きあげるつもりでおりました。まず、この件からお礼を申しあげるべきでした。

昨十五の手紙では、直接に書き入れて、私の手もとには残っていませんが、⑨のところ、改行してすぐ「病気再発」となるのが自然で、空けるとすれば、一字分くらいでいいように思います。「昭和十六年一月」と「病気再発」とをすぐつづけるか、一字分空けるかは、おまかせします。

⑦の点は、ご異論がおありでしょう。私の書いたもので、『著述拾遺』の「あとがき」は三月十五付、さらには『中国語史研究―中国語学とインド学との接点―』でも、「あとがき」相当の「水谷真成先生の横顔」も三月十五付です。もちろん、私は「有坂博士の命日であって、なんとかこの日までにはまにあげると意図して、その日にじっさいに書き終ったものです。

2.

このほか、二月五とあるのは学士院賞授賞の決定の日、一月十日は、私の誕生日でありますけれども、そのことよりも学士院賞授賞内定の日として使っています。

「有坂秀世博士の学士院賞受賞をめぐって」、二月五付、「有坂博士追悼講演会について」、一月十五付等々。

「附記」を後に置き、その最後に右のような月日が来る、というのが、私の癖なのです。

他人からは理解できないことでしょうが、それでお願いするのです。

右十五の手紙を書き直して。

ご健勝を祈念しつつ。

十月十六日

敬具

慶谷書信

吉池孝一様

【2010.12.2　吉池宛】

拝啓　師走のあわただしいころとなりました。
その後もご清祥にておすごしのことと存じます。
さて、しばらくご不さたいたしました。十一月十五、十六日のころ、粗忽な手紙を書きまして、申しわけありませんでした。じつは、中国語学会大会の直前から左の頬がはれてきました。冷しても、はれが引かず、痛みもつきましたので、医者にいくことにしました。しかし、耳鼻科にするか、歯科にするか、内科にするか迷いました。結局、耳鼻科にかかりました。ただ、耳のどこかが悪いわけではなく、耳下腺のリンパ球がはれているというだけでした。痛みがなくなるにはしばらくかかりました。十五、十六日のころは、医者にかかって、時間をとられましたので、粗忽になりました。
なぜはれたのかは、いまだにわからずじまいですが、八月以降二度の正誤表送付の疲れがこの程度ですんでくれたのなら、よしとすべきでしょう。
その後、フランスの萩原久美子氏、台北の謝添基氏にも正誤表を送って、今やっと一息つけたところです。
ところで、印刷の方は進行していますか。ときどきに、そのようすをお知らせ下さい。
それでは、お元気におすごし下さい。

敬具

十二月二日

吉池孝一様

慶谷壽信

【2010.12.17　吉池宛】

拝復　師走のせわしいころながら、
ご清祥にておすごしのことと存じます。
さて、このたびは、『有坂秀世研究―人と学問―』五冊をお送り下さってありがとうございました。
宅急便は、通常なら、早くても九時ごろですが、繁忙期のためか、八時前にとどきました。
本がこんなに早くできあがるとは驚ろきで、十二月末か一月はじめではないかと思っていました。ですから、藤田先生への手紙は、年賀状を書き終ってから用意しようと思っていました。
あいにくと土、日が入りますので、二、三日お待ち下さい。来週の中ごろにはお手もとにとどくようにいたします。
取まずはとり急ぎ、一筆おしらせまで。

敬具

十二月十七日（金）

慶谷壽信

吉池孝一様

【2010.12.18　吉池宛】

前略
藤田先生への手紙、ともかくも書きました。
藤田良雄氏は先生の二男で、先生の一切の世話をされています。
あて先は、お子もとの名簿でわかることと思いますが、念のため記すと、

個人情報のため削除　古代文字資料館

です。
二、三日内にまた手紙を書きます。
まずはとり急ぎ用件のみにて。

十二月十八日　不悉

吉池孝一様　慶谷壽信

【2010.12.20　吉池宛】

拝啓　冬至もまぢか、いよいよ寒さが厳しくなりました。
ご清祥におすごしでしょうか。おうかがいたします。
さて、先週末、藤田先生あての手紙を貴兄あてに投函しました。もうお子もとにとどいて、荷の中に入れていただいたことと存じます。
これから図書館などにお送り下さるとのこと、またお手数をわずらわすが、よろしくお願いいたします。ほぼ一段落したら、どこどこに寄贈したかをお教えください。
よくご存じで、蛇足になるかもしれませんが、図書刊行したときには国立国会図書館へ二部寄贈する定めになっていて、采華書林のような小出版社でも、二冊寄贈しておりました。
私は、もう第一刷ですんでいるかもしれません。
それから、既印刷物を版下として使用する許可を願いました。出版社で、できあがったら一冊ほしい、といっていたところがありました。そこに一冊、お願いいたします。また、『著述拾遺』は三省堂でおきたし、その中から「有坂秀世博士略年譜稿」を利用し、それに訂正を加えていきますので、その違いを認識してもらうためにも、『有坂秀世研究―人と学問―』を三省堂あてに一冊、お願いいたします。そうすれば、有坂三部作に『語勢沿革研究』を加えた、有坂全著作と関連書二冊が三省堂にそろうことになります。
このほかに毎日新聞社（毎日出版文化賞）とかサントリー学芸賞をもっているところに応募してみるお気持はありませんか。私の立場では、身の作品ですから、売り込みをしたい

2.

とは思いますが、ばあいによっては、古代文字資料館の皆様の労をわずらわすことになるかもしれません。この件、謹く申しあげます。

最後に、中国語学文学、国語学、言語学の研究室にも寄贈することになりましたら、各大の中文研究室に一冊、お願いしたいと思います。

それでは、よろしくお願い致します。

ご健勝を祈念しつつ。

十二月二十日

敬具

慶谷壽信

吉池孝一 様

【2010.12.29　吉池宛】

拝復　本年も残すところ、ほんのわずかとなりました。

ご清祥にてお過ごしのこと存じます。

さて、貴信、二十八日に拝受しました。

第二刷の発送を開始して下さったとのことで、ありがとうございました。

藤田先生からは、受領したとのハガキを二十七日に受けとりました。

寒さ厳しき折から、

おからだ大切に よい新年をお迎え下さい。

十二月二十九日

敬具

慶谷壽信

吉池孝一 様

【2011.1.15　吉池宛】

拝啓　寒中のころとなりました。
ご清祥にておすごしのことと存じます。
さて、本の発送は、どのように進んでいますか。
学年末の多忙期に大変なことと思います。
ところで、昨年末に名大中国語文学会論集の
抜刷を中村雅之氏に送りましたところ、「あて所に
尋ねあたりません」と返送されて来ました。
転居先をお教え下さい。
右、まずは一筆、お願いまで。
一月十五日
敬具

【2011.1.28　吉池宛】

拝復　いよいよ寒さ厳しい大寒に入りました。
お元気におすごしですか。
さて、「有坂秀世研究」と「学問」の寄贈先、
73ヶ所のリスト、拝見しました。
ご苦労さまでした。
「残りの二十数冊」とありますが、今回印刷した部数は、
百冊余でしたか。
第一刷刊行直後に、京大の木田章義氏よりは、
全国の大学に送るようにしてほしいとの手紙を受けとりました。
一歩それに近づいているわけですが、肝心の京大図書館、
京大中文、京大国文には送ってありますか。私の方
から京大を指示したことはありませんでしたので、この件、
おうかがいいたします。
なお、名大中国語文学会論輯の抜刷は、ご返事を
いただいてから、中村氏のもとの住所あて送りました。
まだどうなったかわかりませんが、今度返送されて来たら、
愛知県立大の貴兄あて送りますから、そのときには
よろしくお願いいたします。
ご健勝を祈念します。
一月二十八日
敬具
吉池孝一様
慶谷壽信